

コメントと質疑応答

【司会(ドーマン・ベンジャミン/以下、ドーマン)】:ありがとうございます、モンデリ・フランク(以下、モンデリ)。ブックマン・マーク(以下、ブックマン)のコメントに入る前に、参加者の皆さまに、チャットに質問を入力して頂きたいと思います。

【コメンテーター(ブックマン)】:本日のあなたの発表から私が学んだ大切な概念は、「支援消去」という概念です。様々なテクノロジーや、企業が発展していく中で、時間の経過とともに、その発展の過程から、聴覚障がい者や障がい者の経験が、語り継がれずに消し去られていってしまうというコンセプトは、とても重要だと思います。そして、企業慣行の変化や、テクノロジーの開発方法自体が変化するだけでなく、テクノロジーやビジネスの手法と、障がいや聴覚障がいの関係性に応じて、歴史の様々な時点で、違った角度からのストーリーが語られ続けるように思います。

現在このような企業が、聴覚障がいや福祉機器に関する事項を語らないのは、どういった理由があるのか、現在起こっている事象と、あなたの歴史的研究との間にどのような関係があるのか、ということを考えています。現在、ビジネスの場で、支援消去が起きている理由は何だと思えますか?それについてお話しいただけますか?

【講演者(モンデリ)】:それはとても面白く、もっともな質問だと思います。1960年代を見てみると、例えば沖縄で、突発的な発熱の流行がありました。そのため、1960年代後半から1970年代にかけて、聴覚障がいを持つ子供が増加しました。そして当時、すでに補聴器製造から遠ざかっていた、ソニーのような多くの企業は、チャリティーなどに参加するために、一時的に補聴器市場に戻りました。

明らかに、ここではPRが行われています。しかし、あなたも障がい学の研究からご存知のように、障がいということについてまわる、恥や不名誉といった感情は、無視できないものです。特

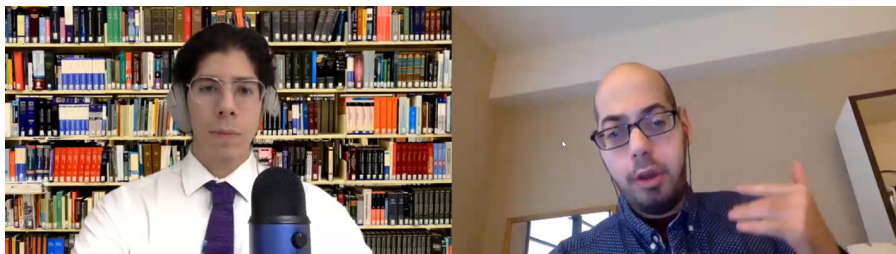


図4.ブックマン氏によるモンデリ氏へのコメント (2020年12月11日ウェビナー /スクリーンショット)

にソニー、当時の東京通信工業のような場合は、最初から戦後の社会環境や混乱を利用して、可能な限り大きな企業を作り、市場を独占しようという、非常に明確な目的がありました。補聴器と聴覚障がい者のコミュニティは、その企業戦略の足がかりにすぎないものでした。また、もし今、ソニーに昔、補聴器のビジネスに関わっていたのかと質問すれば、ソニーがその事実を否定するということではありません。歴史上の事実を婉曲して伝えている、といった陰謀論ではなく、私が言いたいのは、むしろその事実を強調する必要がなく、且つ、それを公表しろという社会的圧力がないのなら、なぜソニーが一時的に補聴器市場に戻ったことを公表するのでしょうか？ということです。このような戦略についての一般の知識が、曖昧なものにとどまっている限り、多分、ソニーはプレイステーションのことや、プレイステーションがどれだけゲームに便利なものか、といったことについてのみ語りたがるでしょう。

ですから、宣伝的要素はあると思います。単純な市場原理の要素もあります。それに加えて、おそらく会社の組織的な記憶の問題もあると思います。現在ソニーで働いている人の中で、ソニーの創業時代に生きていた人は、ほとんどいません。ですから、こういった情報を積極的に探さない限り、この種の問題には気づきません。

【コメンテーター(ブックマン)】:私を取り上げたい点が2つあります。私は組織的記憶と現代のマーケティングは重要な要素だと思います。あなたと同感で、確かに組織的な記憶の問題はあると思います。こういった障がいに関する情報は、戦後大まかにしか伝えられていません。なので障がい者や聴覚障がい者のためのテクノロジーは、開発されているにもかかわらず、メジャーな政策や企業戦略の焦点にはなっていない傾向があります。

しかし、どのような記録が存在するかという問題はさておき、あなたが、社会的プレッシャーがあまりないと思う、と説明したことに興味があります。私は、オリンピックや高齢化の問題、2014年の国連の障がい者権利条約の批准、ちなみに、日本は今年の春に5年目のアセスメントを行う予定です、など、企業がアクセシビリティを宣伝し、障がい者、または聴覚障がい者のコミュニティとのつながりをアピールしなくてはならない、という社会的プレッシャーがあると思っています。

少なくとも私の障がい学の研究では、実際に多くの企業が、こういった隠された歴史を表に引っ張り出してきて、自分たちが昔からどれほどアクセシビリティを考慮してきた企業なのかを見てください、私たちの製品を買いに来てください、と宣伝しているのを見えています。ですから、あなたの研究で、現代の企業が、こういった過去の歴史を表に持ち出そうとしているのを見たことがあるか、それとも今でも全体的に無視されていると思うのか、疑問に思っています。

【講演者(モンデリ)】:あなたの意見は、正にその通りだと思います。そして、私も福祉機器に関するいろいろな条約を見てきました。たくさんの条約があります。そして、私が言いたかったのは、プレッシャーがあるとかプレッシャーが欠如しているということではなく、特に会社の歴史に関しては、福祉機器のことはほぼ完全に消えてしまうということです。いろいろな意味で、新しく画期的なテクノロジーがあるのに、古臭いテクノロジーについて語る理由などない、ということだと思います。介護ロボットは、それ自体が非常に興味深いカテゴリーですが、そういったテクノロジーの話題や、先ほど申し上げたように、ソニーはエンターテインメント機器のアクセシビリティに関するPRに力を入れています。

数年前に、ソニーが大きな節目になる創立記念日を迎えた時、東京の中心部で大きな展示をして、古いソニーのデバイスを見ることができました。このプレゼンテーションで私がお見せした、小さな緑色のラジオの写真がありました。それは1955年のトランジスタラジオで、ソニーの業界での位置づけを決めた、と認識されているものです。ウォークマンの非常に詳細な歴史を見つけるのも簡単でしょう。でもほんの数年前の時点でも、こういったイベントで、ソニーのトランジスタ補聴器の歴史を見つけることはできませんでした。(少なくとも、私はできませんでしたね。)

もしかしたら、将来的には変わってくるかもしれません。例えば、ソニーの次の節目の創業記念日には、補聴器の歴史が得々展示されるかもしれません。しかし、特にこの新型コロナウイルスのパンデミックの中で、福祉機器の普及に関して、今後どういったことが起こるかということに興味があります。そして、私が注目しているのは、今日でも非常に業績が良いリオンのような補聴器メーカーでさえ、昔のモデルについての記録が不完全で、特に先程お話ししたPRツアーのような、企業の内部戦略の歴史に関しては、記録を見せてほしいと会社に問い合わせても、「そのような記録はない」、「そういう記録がどこにあるのかわからない」といった答えが返ってくるということです。

私も「アクセシビリティに力を入れなければならない、という国内および国際的な圧力がますます強まっている。」というあなたの意見と同意見です。しかし、問題は、その議論の結果として何がもたらされるのか、そしてここから実際どういった方向に進むのか、ということだと思います。

【コメンテーター(ブックマン)】:質問がたくさん来ているようなので、時間を取りすぎないように、もう1つだけ質問させてください。あなたは未来についてたくさん話しています。そして、私もアクセシビリティの未来に、非常に興味を持っています。私が知りたいのは、あなたはこの研究が、こういった企業が自分たちの創業の歴史を見直そうとするきっかけになると思います

か?この研究は、私たちが注目すべき歴史の分野について、聴覚障がい学、障がい学、科学技術研究全般に情報を提供するのに役立つと思いますか?最後のスライドで、これについて少し触れていらっしゃいましたが、あなたが想像する理想的な未来を作り上げるために、進めようとしている様々なことに関して、もう少し詳しく説明してもらえたらと思います。

【講演者(モンデリ)】:観衆についてお話しします。企業の従業員に関して言えば、私は日本で
の研究で、様々な企業の多くの人々と話をしました。そして、その企業や業界全般に関して、私が発見したことを話すと、とても驚かれることがよくありました。こういったことは知的好奇心を刺激するようです。

その話が、福祉機器の歴史に関する会社の展示会にどのような影響を与えられるかはわかりませんが、企業展用に作られる様々な技術や製品の写真や歴史を載せた冊子が作成されたら、素晴らしいと思います。私はこのような歴史を明らかにすべきだと思います。もっとたくさんの情報が一般に公開されれば、良い流れに繋がっていくと思います。あなたや私のような活動家が、情報へのアクセスを求めていくことは大切なことです。一種の歴史的偶然、または歴史を調べることから、何を学ぶことができるかという課題に繋がります。

私の発表で特に言いたいのは、私が「リズム感形成」と呼んでいるプロセスが、まだ無くなっていないということです。この政策は、今は自動音声認識というAIの新しい理想に方向転換しています。現在ろう学校では、リズム体操をしたり、リズムバンドなどの活動をしています。そして、手話のグループや手話のパフォーマンスなどもあります。誰がそういった活動に使う歌を作るのか、そして日本や外国で実際に手話の歌が誰のために作られているのかは全く別の課題です。企業のアピールについてはお話ししました、そしてメディア研究に関しては、西洋でも日本でも、素晴らしい研究者がたくさんいます。ジョナサン・スターン、マラ・ミルズ、エリザベス・エルセッサーなど、障がいや障がいの経験、障がいの歴史にもっと注目すべきだ、ということ
を主張しているメディア研究者がたくさんいます。マーシャル・マクルーハンや、もっと古くはハイデガーが執筆した古典的なメディア研究のテキストなどには、肢体不自由など様々な医学的な言葉が使われています。

ですから、あまり深く掘り下げることはしませんが、この研究プロジェクトは、様々な人の様々な身体的体験をもっと深く知り、そういったことにもっと目を向けることが、今日の世界における理解への橋渡しとなる、という議論に結びついていくと思います。

【コメンテーター(ブックマン)】:歴史家で活動家である私としても、とても共感できません。Q&Aに戻りましょう。

【司会(ドーマン)】:最初の質問はミッシェル・ヘノルト・モローネからです。「素晴らしい発表をありがとうございます。聴覚障がい者への支援は、主に民間企業から来ていたようですね。特に学校に対して、どのような公的な支援が行われたのかに関して、コメントいただけますか?そして政府は当時、あるいは現在、民間企業と協力して、ろう学校の学生にそのようなテクノロジーなどを提供しているのでしょうか。公平性の問題には、どのように対処しているのでしょうか?」

【講演者(モンデリ)】:ご質問ありがとうございます。この発表では、「民間」の企業のビジネスの側面に注目しています。しかし、公文書を調べだすと浮かび上がってくるのは、本当に多くの業種がからんでいたということです。多くの場合、民間企業が議論をリードしていますが、民間企業も、教育者や公務員との関わりを無視するわけにはいかない、ということをよく分かっています。

もちろん補聴器メーカーのモチベーションは、製品を販売して、利益を出して、企業として市場で生き残ることです。これは、例えば補聴器や集団補聴器が全く無い、と地方自治体に訴えているけれども、人手不足、資金不足で相手にしてもらえないでいる石川県にあるろう学校の教師の立場とは異なります。この事例は、ヘレン・ケラー財団に関心を持っているという、ベンクの発言にも結びつきます。そうすると、NGOなどの慈善団体に目を向けることになります。そしてこういった慈善団体は、なんらかの公的政策を提唱し、政策立案のための議論、または社会的な議論を推し進めることに関心があります。

ですから、私が強調したいのは、様々な動機を持つ様々なグループがありながらも、聴覚障がいのある子供たちのために、大きな集団補聴器を導入する必要がある、という共通の目的があったということです。政府が今でも、そういったテクノロジーを子供たちに提供するために、民間企業と協力しているかという質問の答えは、確実にイエスです。今では、集団補聴器という言葉はもう使われていません。ループシステム、または他の用語で呼ばれています。大き



図5. モンデリ氏とドーマン氏の質疑応答(2020年12月11日ウェビナー/スクリーンショット)

な機器ではなく、小さなデバイスに進化しています。時折アンテナが部屋を一周します。米国やヨーロッパなどでの、FMラジオのワイヤレス放送のようなものです。民間企業と政府のパートナーシップは、確実に続きます。そして、公平性の問題にどのように対処するかという点では、確かに今の時点では、そういったことは実際に議論されていません。例えばリオンは、限られた台数の集団補聴器を作るための原料しかなく、そのため製造した集団補聴器は、すべて販売する必要があると言っています。では、誰がその集団補聴器を受け取れるのでしょうか？受け取り先には無償で提供しなくてはなりません。支援の公平性というのは、現実的には議論されていません。確かに、最近日本では、一般的にバリアフリーという言葉が使われるようになり、様々なことをバリアフリーにしなければならない、という議論がたくさん行われます。ただ、それが実際に何を意味するのかは、また別の議論になると思います。

【司会(ドーマン)】: 次の質問はウィル・ガードナーからです。「お話しいただいた音を聞く会のようなイベントと、もっと広い意味での日本文化特有の風流な音の楽しみ方の間に関係性があると思いますか？」

【講演者(モンデリ)】: それはとてもおもしろい質問です。日本でこの研究をしているときにとても興味を持ったのは、こういったコンサートで演奏されていた歌の正確なリストを見つけるということでした。結局そういうリストは見つかりませんでした。何が演奏されていたか分かるような説明は見つかりました。1950年代初期から半ばにかけては、民謡が中心でした。その後、時がたつにつれて、クラシックポップスに変わっていきました。

私が知る限り、こういったイベントは、音楽を伝統的に解釈し、社会的な手段として使っていたのだと思います。自分の周りにある音を聞くという点では、確かに補聴器メーカーは、最初は何のノイズが増幅されているか、ということは気にしていませんでした。どれだけ電気を効率的に伝導して、音を大きくできるのか、ということだけを考えていました。その後、1950年代の終わり頃には、補聴器に対する考えは少し進歩し、人間の声の周波数内の音だけを大きくしようとし始めました。その人間の声として使われたのは、研究者の声であり、これもまた別の非常におもしろい議論です。ですから、こういったイベントに関しては、はっきりとは言えませんが、イベント自体は、周囲の音に関するものではなかったと思います。これが、音というもので、聴覚障がいを持つあなたやあなたのお子さんに、こんな素晴らしい経験をもたらすんですよという、ある意味想像上のアイデアを伝えるためのイベントでした。ただ音を耳に入れて、少し後に音楽を耳に入れますが、補聴器は音楽を聞くのにはあまり適していないので、話すことにだけ役立ててください、といった風に。



図6. モンデリ氏、ドーマン氏とブックマン氏の質疑応答(2020年12月11日ウェビナー/スクリーンショット)

【司会(ドーマン)】:ありがとうございます。ここで、このウェビナーの視聴者の方々に、このウェビナーシリーズの一環である、2つのインタビューについてお知らせします。1つは私がAsian Ethnology Podcast(Asian Ethnologyポッドキャスト)でこのウェビナーシリーズに関して、マークにインタビューしたものです。二番目はマークがフランクに彼の研究についてインタビューしたものです。

1. Interview with Mark Bookman: Introduction to the new series "Disability and Japan in the Digital Age" (<https://asianethnology.org/page/podcastbookmanseries>)
2. Interview with Frank Mondelli: Hearing Aids, Assistive Technologies, and Accessibility in Japan (<https://asianethnology.org/page/podcastmondelli>)

スティーブン・フェドロビッチから別の質問があります。「素晴らしい発表をありがとう、フランク。補聴器の開発は、ビジネスの成長と収益につながったようですね。補聴器をろう学校に販売するビジネスによって、授業の口頭教育化が促進され、一方で授業での手話の使用と、学力や知識を高めるための時間が犠牲になったと思いますか？」(聴覚障がい児は、スピーチ、読唇、発音の指導に多くの時間が費やされるために、聴覚障がいのない生徒と比べて学習が遅れてしまう)。

【講演者(モンデリ)】:補聴器を販売するビジネスが、手話を犠牲にして、口頭教育を強化、促進したと言えますか?ということですね。間違いなく、100%そうです。それは目標として明確に述べられています。当時のろう学校の学生が卒業後に書いた個人的な手紙を読むと、JSL、日本手話の使用は控えるように指導されており、ひどい時は手話の使用を犯罪行為のように感じさせるような雰囲気だった、といったことが読み取れます。しかし、忘れてはならないのは、口話主義の教育者が、手話を軽んじたり排除したりする教育を行い、手話の使用をやめさせようと努力していたとしても、生徒は手話を使い続け、教師の目を盗んで手話を使っていたということです。生徒はプライベートでは手話を使っていました。ただ、手話を使い続けることが簡単だった訳ではなく、多くの生徒にとってはとても難しいことでした。

私はあなたが聴覚障がい者のコミュニティーと協力し、手話を広げる仕事をしているのを知っていますが、このウェビナーを聞いている他の方たちは、カレン・ナカムラの本、「Deaf in Japan: Signing and the Politics of Identity」(日本における聴覚障がい:手話とアイデンティティーの駆け引きの意)を読んでも良いと思います。この本を読むと様々な世代の日本手話のユーザーが直面していた時代背景や、1870年代から2000年代にいたるまで、日本手話が日本の社会や日本の聴覚障がい者コミュニティーの中でどういう位置付けにあったかについての社会的、政治的な背景が分かります。

【司会(ドーマン)】:マーク、もっと深く論議したい点などありますか?

【コメンテーター(ブックマン)】:2つ質問があります。あなたの研究プロジェクトの期間区分と、歴史的な偶然性および地政学的状況の重要性に関するものです。あなたの研究は戦後から始まりますが、それ以前に補聴器があったと発表の中でおっしゃっていますよね?それなのになぜ戦後から、というこの特定の時代区分が重要なのか知りたいと思います。戦後に焦点を合わせるべきだ、と思う理由はなんでしょうか?ということから始めたいと思います。

【講演者(モンデリ)】:博士論文と研究のために日本に来た時、私は明治時代、1860年代から現代まで進めようと考えていました。明治はスタートするのにちょうどいい時期だと思いました。そして、研究を進めながら、適宜調整していこうと思っていました。また、戦前の日本に補聴器はありました。日本での補聴器の「始まり」を本当に追おうと思ったら、歴史をはるかに遡って調べることができます。

しかし、1940年代からに研究の時代区分を決めた理由は、それ以前と比べて、全く違う形で日本で補聴器が普及していったからです。1940年代までは、例外を除いて、補聴器はヨーロッパ諸国や米国から輸入されることがほとんどでした。それはそれで興味深いポイントですが、

それは、私が今日の発表で取り上げた大きな社会的、技術的な連帯関係の形成にはあまり結びつきません。地元以外で補聴器を販売するような余裕などない、小さな国内メーカー2、3社では、そういった流れにはなりません。マーク、あなたの研究しているような戦後の、補聴器メーカーが販売市場を広げようとするインセンティブになるような、政治的環境は当時にはありませんでした。

ですから、1940年代は、戦後に始まった、補聴器をめぐる様々な連帯に関わってくる立役者について、語り始めるのに良い時期だと考えています。面白いことに、2020年についても同じことが言えます。もちろん、歴史的な状況は異なりますが、様々な形で古いパターンが多数塗り替えられています。

補聴器のもっと古い歴史を研究する、という別の研究プロジェクトもあり得ると思います。私の研究プロジェクトの続編として、面白いのではないかと思うのは、1930年代です。軍事的な研究についてもう少し詳しく調べてみると、短期間ですが、ホシノフォンのような国内産の補聴器があった時期がありました。戦闘機パイロットの、人工の耳を作ることから始まったものでした。そして、これを発明した人は、これを骨伝導補聴器に変えることができることに気づきました。この時代の研究は、とても面白いプロジェクトになると思います。しかし、その時代でも、私が研究題材にしている、戦後の時代区分に見られるような、そして今日まで続くような、特定の物質やイデオロギーの周りに集まる、大きな集団は存在しませんでした。

【コメンテーター(ブックマン)】:つまり、実際にほぼ同時に起こっているのは、国際市場から国内市場への移行だということですね。ご存知のように、私は「身体障がい者福祉法」についての論文を書いています。そしてあなたの発表でも、この法律について触れています。この「身体障がい者福祉法」が日本における障がいという概念を作り上げ、様々な相互的議論を促しています。少なくとも私はそう理解しています。ですから、この法律が、あなたの研究内容の観点から、どのように見えるかを知るのには本当に興味深く、勉強になります。

【司会(ドーマン)】:わかりました。2つ質問があります。私は、聴覚障がいだけでなく、広い意味での障がいへの理解や、ヘレン・ケラー財団や日本におけるヘレン・ケラー自身の役割に興味があります。

そしてもう一つの質問は、聴覚障がい者が、現代のメディアでこういった風に表現されているかについてです。そして、時間があるかわかりませんが、あなたがなぜこのテーマを研究しているのかにも興味があります。どんな理由でこのテーマを選んだのですか？

【講演者(モンデリ)】:日本でのヘレン・ケラーについて知りたいのであれば、ヘレン・ケラーの2回の訪日と、そこから形成された様々な連合について、もっと広い範囲の論文を書いているマークと話すことを強くお勧めします。ヘレン・ケラーの可能性と日本のインフラに対しての影響、そして彼女の周りに形成された様々な相関関係があります。

私の場合、興味深いのは、日本のろうあ連盟の新聞や出版物を読むと、ヘレン・ケラーについての記事がかなりあります。それ自体はそれほど驚くことではありませんが、彼女のことが記事になる頻度が非常に高く、数え切れないくらいの記事があります。そして記事の内容は、必ずしも彼女のことや、彼女の活動についてではありません。聴覚障がい者のことや、聴覚障がい者へのインタビューで、私はヘレン・ケラーのようにになりたいとか、ピアノを習っているので、次回ヘレン・ケラーが来日したときには、彼女のためにピアノを弾きたい、といった内容のものが多いということです。ですから、彼女はこの時期において、無視できない力のある人物としてみなされるべきです。そして、特に聴覚障がい者コミュニティとヘレン・ケラーに関しては、間違いなく1つの研究プロジェクトとなり得るものだと思います。マーク、あなたの研究は、特に視覚障がい者のコミュニティにおいてのヘレン・ケラーに焦点を当てていますよね。

【コメンテーター(ブックマン)】:彼女は来日する際、毎回、盲目の活動家であった岩橋武夫から招待されていました。彼女が聴覚障がい者の団体よりも名前を出すという点で、視覚障がい者の団体との関係性を知りたい場合は、私の研究を参考にしてください。

【講演者(モンデリ)】:ベン、聴覚障がい者が、メディアでどのように表現されているのかについての質問と、私がこの研究にたどり着いた理由についてお答えします。ご存知のように、日本のポップカルチャー、特にテレビドラマにおいて、聴覚障がい者がどのように表現されているかについての学問が、英語、そしてもちろん日本語でも以前からなされています。それについては、古い学術書がいくつかありますので、喜んでお送りします。そのテーマを扱っている、私を知る限り最新の著書は、Yoshiko Okuyamaの新作で、タイトルは、リフレーミング…リフレーミング…

【コメンテーター(ブックマン)】:Reframing Disability in Manga(漫画から障がいを見つめ直すの意)

【講演者(モンデリ)】:この本の聴覚障がい者のマンガに関する章が、非常に良いので、チェックしてみるのも面白いかもしれません。概して、幅広い観点から見ると、聴覚障がい者の主人公はほとんど女性であり、聴覚障がいを持つことのある種の無力感と女性らしさが結びつけられています。ほとんどは日本のドラマであり、聴覚障がい者、たいていは女性が、大きな困

難に直面し、最終的には、親切な健常者の男性が手話を学ぶか、何らかの方法で彼女と関わりを持つことになります。このパターンは、最近ですと漫画が映画化された、非常に人気のある映画「聲の形」に見られます。少し異なるところはありますが、私が今説明したストーリーのパターンとよく似ています。これについて、書けることがまだたくさんあると思います。現在、佐村河内 守(さむらごうち まもる)事件についての論文の章を書いています。よく知らない方のために説明しますと、彼はNHKなどから、日本のベートーベンと呼ばれていた聴覚障がい者の作曲家でしたが、実は彼の作品はほとんどゴーストライターの代作で、さらに彼自身は完全に耳が聞こえないわけではないことがわかった、というスキャンダルです。私はそのスキャンダルの前後のメディアの表現に非常に興味があります。私の次の研究にご期待ください。

そして、私がこの研究を選んだ理由についてですが、個人的なことを打ち明けますと、私は聴覚障がいがあります。右耳が聞こえなくて、左耳は難聴です。今はヘッドフォンをつけているので、補聴器をつけていません。私は自分の人生の多くの時間を、どうして補聴器はこういう風に作られているのだろうか、誰が製作決定をしたのだろうかと考えて過ごしてきました。このことについては学術のおよび公的に、深く研究調査されるべきことがたくさんあると思います。特に、このプレゼンテーションで何度か触れましたが、日本は世界の音響文化において、主要な役割を担っています。私は書庫で、ドアーズなどのバンドと、日本の補聴器をめぐる連合のその後の音響文化との間に、多くのつながりがあることを発見しました。それは本当に面白いストーリーであり、語りつがれるべきだと思います。

【司会(ドーマン)】:Yoshiko Okuyamaさんのことについて言及されていましたが、数ヶ月前に公開された、Asian Ethnology Podcast (Asian Ethnologyポッドキャスト)で、マークが実際にヨシコさんとインタビューを実施した内容のリンクを皆さんにシェアしたいと思います。

[インタビュー:Yoshiko Okuyama:マンガから障がいを見つめ直す]

<https://asianethnology.org/page/podcastokuyama>

フランク、あなたの素晴らしいプレゼンテーションに対して、心から感謝したいと思います。とても良い刺激になりました。もっと何時間も、たくさんのことについて話し続けることができればいいですね。今日は本当にありがとうございました。

そしてマーク、このプロジェクトを軌道に乗せるために動いてくれたことに、心から感謝します。

参考資料

ポッドキャスト

1. Interview with Mark Bookman: Introduction to the new series "Disability and Japan in the Digital Age" (<https://asianethnology.org/page/podcastbookman-series>)
2. Interview with Frank Mondelli: Hearing Aids, Assistive Technologies, and Accessibility in Japan (<https://asianethnology.org/page/podcastmondelli>)
3. Interview with Yoshiko Okuyama: Reframing Disability in Manga (<https://asianethnology.org/page/podcastokuyama>)
4. Interview with Steven Fedorowicz: Deaf Communities in Japan (<https://asianethnology.org/page/podcastfedorowicz>)

文献

Hui, Alexandra. 2014. "From the Piano Pestilence to the Phonograph Solo: Four Case Studies of Musical Expertise in the Laboratory and on the City Street." In *Sounds of Modern History: Auditory Cultures in 19th and 20th Century Europe*, edited by Daniel Morat, 129–52. New York, NY: Berghahn Books.

Oganesoff, Igor. 1956. "A Tale of Transistors." *Japan Times*.

Okuyama, Yoshiko. 2020. *Reframing Disability in Manga* Honolulu: University of Hawai'i Press.

Nakamura, Karen. 2006. *Deaf in Japan: Signing And the Politics of Identity*, Ithaca, N.Y.: Cornell University Press

リオン社史編纂委員会. 1994. 『リオン50年の歩み』、リオン、p.60

———. 2019. 『リオン75年の歩み』、リオン、p.66

佐藤孝二. 1966年. 「不幸な聾児を地上からなくそう」、9月リオン.

竹田進. 1953年. 『文化:ろう者とリズムの問題』、日本聴力障害新聞58, 11月1日.

Virdi, Jaipreet, and Coreen McGuire. 2018. "Phyllis M. TookeyKerridge and the Science of Audiometric Standardization in Britain." *British Journal for the History of Science* 51 (1): 123–46.

ウェブサイト

Sony. "Chapter5: Rest Assured We Can Make It!." <https://www.sony.com/en/SonyInfo/CorporateInfo/History/SonyHistory/1-05.html> (2021年2月11日閲覧)